

# STRIPPED ASSETS

2009年11月18日

## 1 単語

単語		
行	単語	意味
1	scheme	(名) 計画、企み
2	divine	(形) 神聖な
	providence	(名) 摂理
8	enslave	(動) ~を奴隷にする
11	persist	(動) 固執する、こだわる、依然~である
12	canaries	(名) カナリア諸島
18	coastline	(名) 海岸線
21	naked	(形) 裸の
24	momental	(形) 記念碑の
27	onwards	(副) 前方へ、先へ
29	emperor	(名) 皇帝
40	dominion	(名) 支配権
42	sacrifice	(名) 生贄
43	cannibalism	(名) 人食い主義?
44	Aztecs	(名) アステカ
47	Calibs	(名) カリブ人
48	islanders	島人
50	demographic	(形) 人口統計学的な
	collapse	(名) 崩壊
53	empty	(動) ~を空に移す、移動する
57	extermination	(名) 根絶、絶滅、駆除
60	humanity	(名) 人間、人間らしい
64	accuseAofB	(動) Bの事でAを追及する、告発する

p43 の先頭の行を 1 として、行番号は決められています。

## 2 とりあえず、p43 のまとめ

を作りますが、このページしか読んでおらず、流れが分からないので、全訳にします。また、全体のまとめは後でアップします。

6行目の段落から始めます。

新たに発見された人々が、支配されるか、奴隷にされるか、他の方法で、支配者のために労働に使われるかどうかの問題は、最初の航海から、1516年のフェルナンド王の死まで、ずっと存在していた。彼が死んだとき、イベリア人の勢力は、まだ海岸線を超えておらず、中央、南アメリカの高度な文明に直面していた。町も、金属も、文書も、精巧な政治構造も、記念碑的なお寺もない主に裸の人々との最初の遭遇が、ヨーロッパ人の現地民の人々との関係に対する基本的な考えを生み出した。1519年以降のメキシコ支配は、その年にスペインの支配者だけでなく、ドイツの皇帝にもなった新しいチャールズ王のもとで起こり、それは、カリブ、カナリア諸島のいずれの原住民のと比べて、技術、政治機構においてはるかに洗練された複雑な都市型の帝国文明を含んでいた。しかし、考え方は大西洋での最初の遭遇から持ち込まれた。特に、キリスト教の信者は、これらの人々に対する、特にかつてのアステカのように、人間を生贄にし、人食い主義を実践していた人々に対して、支配権を主張する権利があるかどうかの問題だ。

今日では、Taino?は全く残っておらず、カリブ人もほとんどいないし、カナリア諸島の島民もいない。支配の後には、驚くべきスピードで、人口の崩壊が起こった。そして、これは、病気、駆除、放置、風俗壊乱の影響によって、北、南アメリカ、オーストラリア、原住民のいる他の土地の広い地域を空にしてしまう一連の体験の序章に過ぎなかった。それゆえに、このテーマは、人文学の歴史のまさに中心に存在している。しかし、そのテーマは人文学ではない。ヨーロッパ人が出会った人々の中で、自分たちの都合で、しばしば、劣っている追及されてきた人々に対する、ヨーロッパ人の非人文学さである。

### 3 全体のまとめ

今回は、かなりやっかいそう、というかやっかいでした。マルタの再来ですね。

最初は、コロンブスの話から始まりますね。1492年に、コロンブスはサンサルバドル島<sup>\*1</sup>というバハマにある島にたどり着きます。そこで、彼はタイノ族<sup>\*2</sup>の人々に出会います(当初は、怪物かと思ったらしいですけど・・・)。彼らの特徴を箇条書きにしてみると、

- みんな裸であった
- 体がとても美しかった
- 顔は感じがよさそうであった
- 顔や体にペイントがしてある
- 肌の色は白くも黒くもない

てな感じだったそうです。

時は、ルネサンス<sup>\*3</sup>の時代にさかのぼります(14c 半ば-16c)。ルネサンス期には、大航海時代と重なり、ヨーロッパの国々は日本や中国における金や香辛料を求めたり、また自らの信ずるキリスト教にたいしてイスラム教を敵視する動きなどがありました。大航海時代は、ポルトガルがアフリカを探検したことに端を発し、その後、スペイン人によって大西洋を通過して、西インド諸島へたどる道が開かれました。この時期に、ヨーロッパ人は初めて大西洋の向こうにいる人々に出会うわけですね。

この1500年ごろ、ヨーロッパ人たちはある重大な疑問にぶち当たります。それは、この原始的なやつら<sup>\*4</sup>はいったい人間なのか？人間の形をした野獣ではないのか？都合よく、労働にこき使えるだろうか？などといったことです。もちろん、人間かどうかの定義は、見た目で判断していたわけですが、当時の人々の頭の中には、犬の頭をした人間(p38の上に絵がありますね。)がアジアやアフリカにいるという考えがありました。しかし、実際には、行動を見る限り、どう見ても人間だったわけです。この後、なぜキリスト教をこいつらは信仰していないんだ!?キリストの言葉は世界の隅々まで知れ渡っているんじゃないのか？などいろいろ思ったらしいですけど、ここん所はあんまり重要とは思えないので省略。

新しい人々との出会いには、驚くべき点がありました。またも箇条書きにしてみると、

- アジアやアフリカなどヨーロッパに隣接していない場所で、奇妙な人間たちに出会ってしまったこと。

---

\*1 バハマ諸島の東の端、大西洋に面した位置にある。

\*2 タイノ族(Tano)は、アラワク族語系に属するキューバ、イスパニョーラ島(ハイチとドミニカ共和国)、プエルトリコ、そしてジャマイカを含む大アンティル諸島とバハマ諸島の、クリストファー・コロンブス到着以前から先住するインディアン部族である。18世紀には、スペイン人によるプランテーションでの使役や疫病により、タイノ族の社会はおそらく絶滅した。

\*3 この時期に、宇宙における人間の立場についての考えに刺激を与える過去の再発見をヨーロッパの人々はしたそうです。ルネサンスには、もう一度過去の価値を探ろうという動きがあったんですね。本文とはあんまり関係なさそうなので、ここに書きました。

\*4 コロンブスはバハマの人と出会ったのは先ほど述べましたね。この後、カリブの人やイスパニョーラ島の人々とも出会いますが、こうした人々の事を指しています。

- 世界と分離された、簡素な生活を営み、富や財産などの物質的な関心のない人々であったこと。

まさに、この2点目に付け込まれていくわけですね。何も知らない人には、金の価値など分からないと考えたのでしょう(この辺は、本文と違うかも)。

こうしたヨーロッパ人との出会いが、スペインに支配されることになる現地の人々や土地にも大きな影響をもたらすこととなります。金鉱で働かされ、奴隷にされ、過労死に追い込まれ、ヨーロッパから免疫を持たない病気を持ちこまれたりします。植民地から、金やのちには砂糖を抽出するために大勢の人々が犠牲になりました。これは、完全に、支配する側の愚かさだと筆者は言っています。実際、多くの犠牲者が出てきたために、さらなる悲劇的な結果をもたらされることとなります。それは、不足した労働者をアフリカから補うというものです。これを、奴隷貿易と言います。

また、少し前の時代に話が戻ります。こうした話は、コロンブスに始まったのではなく、1340年ごろからカナリア諸島を探検した最初のヨーロッパ人だと書かれています。カナリア諸島の人々は、穴をほってすんでおり、北アフリカのベルベル人<sup>\*5</sup>に密接にかかわっている家畜飼育者だったらしいです。ヨーロッパ人は彼らが、金属に関する知識もないことを目の当たりにし、また本によってカリブの人々への態度が形成されたそうです。

ヨーロッパ人のカナリア諸島の人々への戸惑いは、ポルトガルやフランス、スペインの支配の際の激しい抵抗に見られるような、騎士道<sup>\*6</sup>にかなった価値観への賞賛と結び付いたそうです。また、彼らの実直で正直なところ<sup>\*7</sup>が恰好のターゲットになったそうです。

カナリア諸島への最初の探検は、ポルトガル王のもとで1341年に起こったそうです。(なんかちょっと前にあったけど)カナリア諸島の人々は金もワインもパンも持ってなかったけど、リーダーに対する服従やハンサムで礼儀正しいところなどがあって、ポッカチオなんかはこうした民族の簡素な生活に感銘を受けたそうです。一方で、ペトラルカなんかは、交流もなく野蛮だとしています。要するに、こうしたカナリア諸島の人々に対する意見は、良いとする見方と悪いとする見方との二極化が起こったということです。ポルトガルの王は後者の意見に(悪いとする方)に賛成してキリスト教の力で抑え込もうとしたんだけど、1479年にカナリア諸島は条約によってスペインのものとなります。

ここで、キリスト教の王が、何も悪さをしているわけでもない非キリスト教信者を支配をしていいのだろうかという問題が活発に議論されました。一つの見方は、最初の純粋なままにしておくべきだよっていうもの。もう一つの見方は、カナリア諸島の人々は自分たちの事もコントロールできないんだから、(支配するべきだよ・書いてないけどね)っていうも

<sup>\*5</sup> 北アフリカの広い地域に古くから住み、現在も一定の人口をもち、文化的な独自性を維持する先住民族である。宗教はイスラム教を信じる。

<sup>\*6</sup> 騎士たる者が従うべきとされたもので、決して現実の騎士の行動が常に騎士道に適っていたわけではない。むしろ逆の行動、つまり裏切り、貪欲、略奪、強姦、残虐行為などを行う事を常としていた。だからこそ彼等の暴力を抑止するため、倫理規範、無私の勇気、優しさ、慈悲の心といったものを「騎士道」という形で生み出したとも言える。通常の騎士であれば遵守する事は難しく、騎士道に従って行動する騎士は周囲から賞賛され、騎士もそれを榮譽と考えた。

<sup>\*7</sup> 例えば、海岸で拾ったメアリの像を上げくうやまったりとか・・・などなどいろいろ書いてありますがここでは省略。

の。中間っていう見方もあったけどね。インディアンの人々の最大の保護者は、ラスカサスさんだったそうです。(またあとで出てきます。)

バハマの話になります。バハマ諸島のタイノ族やカリブはコロンブスによってカナリア諸島の支配が完全に終わる前に、発見されます。彼らは、カヌーを使いながら、周辺の島々でお互いにコンタクトを取りながら、ネットワークを築いていたみたいです。社会構造の存在や、家族関係もあり、一人の創造主たる神様を信じていたみたいです。また、素直で、穏やかな人々だったそうです。しかしながら、スペインによる保護を必要としていたそうです。理由は、残酷な人食いだと言い伝えられているカリブ人？から自分たちを守ってほしいというものでした。ここで、重要なことは人食い人種とタイノ族ははっきりと区別されていたということです。この後は、あんまり重要そうではないので省略。

コロンブスは、タイノ族のインディアンに対して、肯定的な意見を持っていました。金でいっぱい肥えた土地に住んでいるし、素直で簡素な生活をしていることを楽園と呼んだそうです。一方で、コロンブスの友人であるアメリゴヴェスプッチはアメリカのインディアンに対して否定的な見方を持っていたそうです。

そんなこんなで、時代は1500年ごろになっていたのですが、この時期になると、ポルトガルはブラジルを発見します。このときに、ポルトガル王のもとにブラジルにいるインディアンについての報告書が送られてきます。この報告書は2通りに解釈することができて、一つは人々がエデンの園のような楽園に住んでいるということ、もう一つは、人々は残酷な動物のように恥の意識もなく、性器を露出したりしていたということ。ポッカチオとペトラルカの議論の続きみたいなもんです。ポルトガルのブラジル発見者たちは、クリスチャンとして保護したいと思うものもあれば、攻撃的な人もいました。攻撃的な人でいえば、例えば、Oviedoなどがいて、現地の人々が裸で生活しているというのは、変態じゃないかとか、近親相姦してるんじゃないのかとかいう疑いとか恐れを抱いたんですね。アメリカ先住民はクリスチャンたちとは別の価値観の中で生きているということが理解できていなかったんですね。クリスチャンにとって恥であっても原住民にとっては恥ではなかったということです。

スペインはタイノ族を法的に自由の身であるとし、奴隷化は禁じられていました。しかし、タイノ族の人々はいまだ金を貢物として支払うよう求められており、ラスカサスなんかは奴隷以上に扱いが悪いと言っていたぐらいだそうです。彼らは糞便のように扱われていたとも書かれています。んで、スペイン政府もこういう状況に気づいていなかったわけではなかったそうです。そこで、効果がないながらもタイノ族の保護をする法案が通ったそうです。これは、おそらく金を確保したかったからでしょう。労働力がなければ、金は掘り出せないからですね。でも、実際には法案では自由の身と言いながら、"natural slaves"とか言って、生まれながらに服従する性格で、真の支配権を行使できないとか言って、こき使われていたわけですね。さらに、病気も広がっていきました。免疫がなかったからです。出生率も下がっていきました。男の人は女の人から引き離されていたからだそうです。

スペイン人たちはインディアンの精神を理解することには全く関心がなかったそうです。

またまた、Oviedo のように、インディアンたちはヨーロッパ人のような素晴らしい精神ではないと言ったり、奴隷を保護したラスカサスでさえ、インディアンは子供のようなものだから、保護するに値するなんていっていたそうです。また、ラスカサスは、インディアンたちをキリスト教徒にしたかったみたいです。でも、自身の著書の中で、こんなことを語ったそうです。”タイノ族のリーダーが部下たちに語りました。ヨーロッパ人は神様を信じていて、自分たちにもそれを信じてもらいたいから、支配したり闘ったりするんだ、と。そして、金や宝石でいっぱいのかごを持って、また言いました。これが、キリスト教徒たちの神様だそうだ、と。”ラスカサスはまた、タイノ族の人々はスペインの支配に抵抗したとも書いていたそうです。(彼はインディアンの側についたみたいです)

ヨーロッパ人の原始的な人々との出会いは人間とは一体何なのか？という根源的な問いを生み出したそうです。これが、さらに深まって行って、なぜ、神様はこれらの人々に自分の言葉を知らぬまま成長させたのか？とか思ったそうです。これに対して、また Oviedo のように、インディアンたちは馬鹿すぎてキリスト教の価値が理解できないんだとか言ったり、今こそが(=1500年ごろ)がキリストの言葉を伝える最終章ではないのか、つまり自分たちがインディアンたちにキリスト教を伝えることで、世界の人々全体にキリスト教が広まるのではないかといった意見の人もいたそうです。こうした考えが、1492年にスペインからユダヤ人を排除したり、イスラム教徒を追い払ったりすることにも結び付いていったんだと思います。(この辺、正直よくわかりません)

最後のページは、前章の p43 のまとめで代えさせていただきます。多分こんな感じの事だと思いますが、間違っていて読むところもあると思うので、注意してください。意味不明なところもあると思いますが、ご容赦ください。by まつ